

宮崎公立大学におけるリベラル・アーツとは何か ―「MMUの本棚」(仮称)の構想―

For Making Profession of Liberal-Arts in Miyazaki Municipal University :
Designing the “Bookshelves of MMU”

倉 真一・渡邊英理・梅津顕一郎

グローバル化が進み、既存の国民国家の枠組みが機能不全を起し、新自由主義的原理が社会の隅々を横溢する中で、大学も、そして「リベラル・アーツ」という概念もまた、その意義の再考が余儀なくされている。本稿では、特に「リベラル・アーツ」を根幹におく本学の教育実践を、基礎演習の取り組みを例に検討し、その考察をもとに、試みに「リベラル・アーツ」の再文脈化に向けて、教育の場における選書という企てをめぐる新たな教育実践を提起してみたい。

キーワード：リベラル・アーツ、再文脈化、基礎演習、新入生のための教養書、MMUの本棚

目次

- I はじめに～問題提起～
- II 基礎演習から考える「リベラル・アーツ」
- III 「MMUの本棚」(仮称)という仕掛け

I はじめに～問題提起～

「リベラル・アーツって何ですか?」、「リベラル・アーツで何を具体的に学ぶのですか?」、「昔の国立大学の教養課程とどこが違うのですか?」、「国際文化学科でリベラル・アーツ?英語以外にイメージ湧かないのですが…」、「人文学部でリベラル・アーツ?実際何の役に立つのですか?」等々。

本稿の論者たちも含め本学の教職員であれば、これらは、高校の先生方や生徒達、学生やその

保護者の方々、一般市民から一度ならず寄せられたことのある質問や疑問ではないだろうか。そうした（時には否定的なニュアンスを含んでいることもある）質問や疑問に対して、論者たちは論者たちなりの見解を持っているつもりではある。しかし、大学や学部の一員としての立場で、こうした質問や疑問に公的に答えようとする、どうしても何かすっきりと説明できない、換言すれば堂々と公言（profession）できないのである。うまく公言できないまま、結局は「国際化に必要な幅広い教養をベースに…、ゼミを中心とした少人数教育で…、面倒見のイイ大学です！」という、それ自体は決して間違っていないけれども、今や全国どこの大学案内にも書いてある、もはやユニークともいえない特色の繰り返しへと、質問への回答はいつも上滑りしてしまうことになる⁽¹⁾。

ともあれ、リベラル・アーツに関する問いに対して、いささか不本意な回答が行われてしまう理由のひとつは、実のところ、リベラル・アーツ教育とは何かに関して、教員間の共通理解や大学の公式見解自体がいまだ明確には存在していないということに求められるように思われる。そうした共通理解を創造していく学内的な取り組みが、まずは必要なのではないかとというのが、本稿の論者たちの基本的な立場である。

しかしながら、リベラル・アーツを公言することにまつわるこうした困難を、一地方の一公立大学の一教員がたまたま直面してしまっている問題として片付けるだけでは事足りない。例えば、広島大学総合科学部におけるプロジェクトの成果が、『大学新入生に薦める 101 冊の本』という形で刊行された際、編者はその序章を以下の文章から始めている。

大学における一般教養あるいは教養的教育は、米国では「リベラル・アーツ」と呼ばれていますが、それが二一世紀の現代においてどのようなものであるべきか、という点については、日本国にコンセンサスがありません。それはこの国のゆくすえについての社会的合意がないためです [広島大学総合科学部 101 冊の本プロジェクト, 2005:1]

大学新入生向けのリベラル・アーツ入門用ガイドブックの冒頭で、21 世紀の現代において「リベラル・アーツ」が「どのようなものであるべきか」ということに関して、「日本国」にはコンセンサスが存在しないことが言明される。そのうえでコンセンサスが存在しない理由として、「この国のゆくすえについての社会的合意」の不在が指摘されるのである。

こうした言明をせざるをえない背景として、「日本国」という国民国家の揺らぎ、より大きな文脈から言えば、「国民国家」という枠組み自体の中長期的な衰退をあげることができるだろう。レディングス (Bill Readings) や吉見俊哉が指摘するように、リベラル・アーツや、またそれを含む今日の大学の抱える困難は、すべからく国民国家の衰退あるいは退潮という歴史的变化が躍起する問題として捉えることができるのだ [レディングス, 2000:60-73] [吉見, 2011:237-240]。

吉見俊哉が整理するように、大学は、二度誕生している。中世ヨーロッパの都市とともに誕生

をし、その都市の衰退とともにその役目を一度終える。その大学がふたたび息を吹き返すのは、近代、すなわち国民国家の時代である。そして、それが、現代の大学のもっとも近い起源となり、後発資本主義国であった日本にとっては、国民国家に依拠した近代の大学こそが、はじめての大学であり、現代まで続く大学の起源となった〔吉見, 2011〕。

近代の大学は、国民国家と結びつきながら、理性あるいは文化といった中心的理念をかかげ、国家の主体（国民）を産出する文化装置あるいはイデオロギー装置として存続してきた。文化＝教養をつうじた主体の陶冶は、大学という機関において、人文学（humanities）によって担われるべき主要な役割ともされてきた。古典研究なかでも文学を通じて、文化＝教養とは涵養されるとされた。例えば、イングランドの大学においては、古典としてのシェークスピアを通じて、教養ある真のイングランド国民は育まれると考えられた。

無論、こうした国民主体の陶冶を担う人文学（humanities）は、今日、階級やジェンダー、フェミニズムの観点から批判的に検証されている。シェークスピアを通じて滋養される、教養ある真のイングランド国民とは、gentlemenという階級／ジェンダーと近似した何者かに他ならなかった。さらに言えば、ここでの人文学(humanities)が持つ、中世ヨーロッパにおける大学のリベラル・アーツの伝統との切断面をも、あわせて確認しておくべきだろう。中世ヨーロッパの大学において、哲学を中心とする自由学芸、すなわちリベラル・アーツは、法学、医学といった実学を批判的に相対化すべくおかれていた〔吉見, 2011: 22-49〕。

国民国家の衰退という歴史的变化は、いわゆるグローバル化にともなって生じていることは間違いないであろう。日本において、1990年代以降にリベラル・アーツ教育を掲げて誕生した本学を含めた大学や学部・学科の多くが、「国際文化学科」や「国際教養学部」といった名称を用いた事実は、長らく大学の知的活動を支えてきた「文化＝教養」という国民的に想像された構築物と、国際化への対応あるいはグローバル人材の育成という大学に対する社会的な要請とを折衷しようとする試みだったと思われる。しかし、グローバル化のなかで大学の知的活動を支えるはずの／グローバル人材（「国際教養人」「グローバル・リーダー」等としばしば呼ばれる）がそれを通じて養成されるはずの新たな「文化＝教養」像は、四半世紀近く経ても一向に焦点を結びそうにない。そもそもグローバル化時代において大学の知的活動（教育と研究）を支える理念が、国民国家とともにあった「文化＝教養」の延長線上に構想すべきものなのかどうか。それもまた定かではない。

いずれにせよ、国民国家の衰退とともに（＝大学を支えた「文化＝教養」という理念が失効するなかで）、レディングスと吉見が指摘するように、大学は国民国家のイデオロギー装置から、それとは異質なグローバルな「官僚制的経営体」に変貌しつつある。今日グローバルな「官僚制的経営体」としての大学は、「エクセレンス」（卓越性）というそれ自体は空虚な、非指示的かつ経営的な概念に準拠しようとする。「エクセレンスに訴えることは、大学の理念がもはや存在しない、あるいは、大学の理念がいまやすべての内容を失ってしまっているという事実を示している」と、レディングスは主張する〔レディングス, 2000: 54〕。だとすれば大学の理念とその内容も失った「廃

墟のなかの大学」で、それでも大学において教授する職 (professor) を担うプロ (professional) として、リベラル・アーツ教育とその実践を公言 (profession) していくことができるだろうか⁽²⁾。

本稿は、リベラル・アーツとは何か、という問いに答えることや、リベラル・アーツを大学の教育や研究の理念として共有することが、今日いかに困難であるかを自覚しつつ、それでもなお大学におけるリベラル・アーツの意味や価値を探求することには、今日的な意義があるはずだという信念にもとづいて書かれている。

具体的には、宮崎公立大学におけるこれまでのリベラル・アーツ教育の実践をベースにしつつ、それらを批判的に発展させることで、リベラル・アーツを大学の教育や研究を支える理念として、いかにすれば現在の宮崎公立大学のカリキュラムのなかで再文脈化 (=再埋め込み化) しようか。そのための仕掛けを「MMUの本棚」(仮称)の構想という形で提案したい。

II 基礎演習から考える「リベラル・アーツ」

宮崎公立大学に入学した学生が、最初に、リベラル・アーツの精神に総体として触れる科目はなにか。そのひとつは、おそらく基礎演習であろう。たとえば、本学のシラバスは基礎演習について、以下のように述べている。

「基礎演習」は専門基礎に位置づけられ、大学での学修に不可欠な学術上の基礎的必須事項 (academic essentials) を習得するための演習です。

大学での学修の中核は研究 (study = 自ら学ぶこと) にあります。研究にはそれに相応しい「態度」と「技能 (スキル)」として、自ら進んでテーマを探す「主体性」と、テーマに基づいて適切に検討するための「スキル (適切な文献資料の見分け方、文献講読や論述のための言語力、多角的でバランスの取れた検討、図表の使い方など検討成果を的確に伝えるための表現方法など)」が求められます。

「基礎演習」では、リベラル・アーツに関わる多様な文献資料の購読や、少人数ゼミでの学修を通じて、研究のために特に重要なスキルである「言語力」(文献を読む力と、論理的に考察し自分の考察を適切に表現する力)の獲得を中心に、研究に必要な要件について学びます。特に、「基礎演習A」では読むための力を、「基礎演習B」では書くための力を身につけます。

このように本学の基礎演習とは、一年生全員を必修とする初年度教育の演習科目である。この科目では、研究のために特に重要なスキルである「言語力」一広義の「日本語リテラシー」を育み、

「大学での学修に不可欠な学術上の基礎的必須事項 (academic essentials)」を獲得することを目的とし、また同時に、ゼミ活動を通じて学生の大学への定着も図られる。

その「日本語リテラシー」と表裏のアカデミック・スキルは、「リベラル・アーツに関わる多様な文献資料」に触れる実践において養われる。ならば、基礎演習で読み解かれるべき文献こそ、本学の「リベラル・アーツ」の精神を体現するものにふさわしい。そして、それらは4年間の「リベラル・アーツ」の学びの、よき礎になることが望まれる。すなわち、ここで問われるのは「リベラル・アーツ」の知そのものなのだ。

だが、実のところ「リベラル・アーツ」の知の体得は、そもそも現状の基礎演習の実践において、十分には追求されていない側面があるのもまた事実であろう。

たとえば、本学のシラバスは上の引用部を、以下のように続けている。

「基礎演習B」では、特に「書くための言語能力の獲得」を目標に、自分の考えを理論的に確かな文章表現にまとめるためのスキルと態度の修得・発揮及び定着を目指します。具体的には、担当教員が指定した図書を題材に「期末レポート(書評)」を作成します。基礎演習Bにおける「期末レポート(書評)」は「1冊の本を取り上げ、その内容を要約した上で、学生自身の意見を述べたもの」です。

必要な情報を収集し、それらを的確にまとめ、自分の意見を加えて効果的に発信することは、どこでどんな仕事をするにも必要不可欠な技能です。基礎演習では、教養あるグローバル人材に必要な情報の収集・整理・発信の基礎を学びます。「演習」は“自ら演ずることによって学習する場”ですから、語学や情報の科目、基礎講義などで修得した技能と知識も活用しながら、積極的・主体的に取り組みましょう。

まず、最初に断っておきたいのは、論者らは本学の基礎演習の現状を、超越的な立場で自らを無傷な位置において、頭ごなしに否定したいのではない。そうではなくて、むしろ長短はあるものの、その実践に少なからず携わってきた者たちとして、現状の問題点を内在的に洗い出し、本来の意味で本学の教育の質を高めることに寄与したいという、一教育者／研究者としての「良心」から本稿は起草されている。すなわち、基礎演習に対して内在的な立場から、語本来の意味での生産的な批判＝クリティーク行為を行うこと。他にもない、現状の基礎演習のシラバスの執筆に深く関与したメンバーが、本稿の著者に名前を連ねていることはその証左であろう。

そうした内在的かつ生産的な批判として、以下、いささか簡略ではあるが、本学の基礎演習をシラバスをもとに検討を続けてみよう。

「情報の収集・整理・発信」など、「教養あるグローバル人材に必要な」「どこでどんな仕事をするにも必要不可欠な技能」の獲得。つまるところ、これが本学の基礎演習の目標だと言える。ここで強調されるのは、基礎演習で身につけるのは「どこでどんな仕事をするにも必要不可欠な

技能」であるという点である。それは、すなわち、社会人基礎力としての技術であり、言い換えれば、社会に有用な労働者として必要となる「技能」だと言える。

むろん、こうしたレトリックが、ブッキッシュな「教養」への耐性が少ない若い学生に対して、学びの意欲を喚起するべく用いられている面は否定できない。しかし、問題はまさにそのようなレトリックの中で、アーツ（知／技術）というものの知の側面が、見事に削ぎ取られているという一事である。シラバスの最後に、「基礎講義などで修得した技能と知識」とあり、そこで「知」の一字が現れるが、しかし「目標」として目指されているのは「スキルと態度」の習得である。「リベラル・アーツ」に含まれる知の体得は希薄と言わざるを得ず、ここで重視されるのは、社会人基礎力としての「技能」であり、それは「社会人」＝社会に有用な「労働者」として必要となる「技能」に他ならない。

いかなる人々も「労働者」として生きざるを得ないこの世界で、このような「技能」を軽んじてよいとは思わない。しかしながら、人は「労働者」としてのみ生きる訳ではない。むしろ、生命の維持保障のために賃労働を介して「実存」を引き換えとするような過程が、労働者になることだとすれば、そうした「労働」の回路から常にはみだしてしまう個別の、かけがえのない生の場。経済原理が社会の隅々をくまなく横溢し、息苦しくなるばかりの世の中で、そのような生の「実存」の場を未来ある学生に提示するのは、大学のひとつの機能であり重要な使命とも言えるかもしれない。

ここでの「リベラル・アーツ」とは、まさにそのような生の「実存」を開くための鍵を握るアーツ（知／技術）として措定することができるだろう。

「教養あるグローバル人材に必要な」「どこでどんな仕事をするにも必要不可欠な技能」。それは、多分に、経済至上主義的な人間観において労働者として必要な「技能」、また市場原理主義の競争社会で競争相手という他者を出し抜く「卓越化」の「技能」、あるいはマーケティングの論理で他者との差異化のための実質を伴わない記号ゲームのような「卓越化」の「技能」と近似して見える⁽³⁾。そうだとすれば、「リベラル・アーツ」を、かりにその対極にある領域のものとして析出してみることもできるかもしれない。取り替え可能な「労働力」としてではなく、「労働」の回路から常にはみだしてしまう個別の、かけがえのない生を生きる人間として必要なアーツ（知／技術）。あるいは競い合うライバルとしての他者ではなく、互いに他を支え合う、他者と出会い、つながるためのアーツ（知／技術）。あるいは、異なる者、少数者を理解し共存するためのアーツ（知／技術）。いわば、この時代を自分（とその周囲）だけがサバイブするためだけでなく、まさにこの世界をかけがえのないものへと変え、誰かと共に生きるためのアーツ（知／技術）。そういった観点で、アーツ（知／技術）を鍛え直していくことが、今ほど切実な課題として浮上している時代はないだろう。すなわち、いま求められているのは、われわれにとって切実なるものとしての「リベラル・アーツ」の再文脈化なのである。

III 「MMUの本棚」(仮称)という仕掛け

では、この「リベラル・アーツ」を再文脈化し、共有していく過程で、有効となる取り組みは何であろうか。そのひとつが、共有／共通テキストやブックリストの作成である。人文学部国際文化学科という単科大学である本学が標榜する国際文化学の入門となるような論集を出版する、あるいは「リベラル・アーツ」の精神を体現するような基礎演習用のブックリストを作成することなどが、ひとつの有為な取り組みとしてここで浮上してくる。

たとえば、ブックリストに関して言えば、すぐに東京大学(『教養のためのガイドブック』『ブックガイド東大教師が新入生にすすめる本』)や広島大学(大学新入生に薦める101冊の本)における先駆的な取り組みをあげることができ、また共有テキストの製作においては、静岡文化芸術大学の『国際文化学への第一歩』や山口県立大学の『星座としての国際文化学』が、人文学部国際文化学科を標榜する本学にとっては重要な参照項となるだろう。こうした取り組みを通じて、大学は教育理念や教育内容を具体化し、それを学内で共有し、また対外的にもその教育研究活動を広く「表現」＝「公言」していると言える。

さらに言えば、共有／共通テキストやブックリストの作成は、いまひとつの大きな副産物をももたらしている。それは共有／共通テキストやブックリストが、授業の質を一定程度担保し、FD的な「授業の質の向上」という観点でも、一定の効果が期待できるということである。このように、共有／共通テキストやブックリストの作成が大学にもたらす効果は、少なく見積もっても以上のような点をあげることができる。

では本学において、どのような取り組みが可能であろうか。本稿では、以下、ブックリストの作成という観点に基づいて、ひとつの問題提起を試みたい。

1 大学の知的な共有財産としてのブックリスト―リベラル・アーツ教育の象徴として―

本学における基礎演習への取り組みのなかで活用される共有ブックリストの作成を提案するに先だって、ある前提―論者らはそれを妥当な前提だと判断しているが―を示しておきたい。それは、ブックリストの選書基準の骨子となる、今日のリベラル・アーツはいかにあるべきかといった理念や方法に関する大学内外における社会的な合意は存在せず、教員間でもそうした理念や方法は必ずしも共有されていない、という前提である。

これまでの基礎演習の取り組みのなかでも、学生が書評する本の選択肢となる共有ブックリストは作成されてきた。各教員から推薦された本のリストを合体して、書架記号順に並べたブックリストがそれである。その中で、学生は100冊をゆうに超えるリストの中から、書評したい本を任意に一冊選択することになっていた。これはリベラル・アーツの理念や実践方法に関して、

一定の合意や共有があるはず、という暗黙の前提をもとにした選書の方法だったと考えられる。

しかし、この選書方法によるブックリストの作成は、現在行われていない。各ゼミで15名を超えるゼミ生がバラバラに本を選んでくるために、書評の指導を担当する教員の負担が大きかったことも理由の一つであるが、担当教員の一員としての率直な感想をいわせてもらえば、「共有」リストの中味が「玉石混交」であったことも問題であった。確かに「玉」が大半であったとはいえ、「石」と思われる本も少なからず存在していた。しかも、リベラル・アーツ入門の段階にある新生生には、本を見分ける十分な選別眼が期待できないこともあり、「悪貨が良貨を駆逐する」ではないが、「玉」でなく「石」の方を学生が選好してしまうことも多々あった。

結果として、今年度から担当各教員が自分のゼミ生向けに書評対象本を少数（3～5冊程度）に絞って提示し、それをみて学生が希望のゼミを選択する方法に基礎演習は変更となった。こうした経緯から示唆されるのは、当初の暗黙の前提への疑問、すなわちリベラル・アーツ教育の理念や実践方法において教員間の合意や共有がなされていない可能性である。その点を顧みることなく、共有ブックリストの作成のみを放棄すれば、全学生の共通カリキュラムである基礎演習の実践を、リベラル・アーツ教育の理念や方法の共有が不十分な可能性を放置したままで、各学生の未熟な選別眼にかわって、こんどは各教員の個人的な努力や見識に、ただただ丸投げすることになりかねない。

ではどうすれば良いのだろうか。ここで提案したいのは、第一に、リベラル・アーツ教育の理念や方法に関する教員間の合意や共有の不在をまずは認める。第二に、リベラル・アーツの理念や実践方法の共有は、大学全体の共有財産としての基礎演習を「共同」運用するなかで考え練り上げていく。第三に、基礎演習を「共同」運用する実践の要として、共有ブックリストの作成を位置づける。第四に、基礎演習における共有ブックリストを、宮崎公立大学の共有財産かつリベラル・アーツ教育のあり方を象徴するものとして分かりやすく内外に表現＝公言する。読者諸兄にイメージしやすいよう、本稿では宮崎公立大学（Miyazaki Municipal University）の頭文字をとり、ここで作成されるべき共有ブックリストを、仮に「MMUの本棚」と呼ぶことにしよう。

2 基礎演習の共有ブックリスト「MMUの本棚」の選定方法

以下では、具体的に「MMUの本棚」（仮称）を基礎演習のなかでどのように位置づけ、共通ブックリストとしてどのように選定し活用することが出来るのか、具体的に述べていきたい。

まず、「基礎演習」で1年生が取り組むことになる書評本の候補リストとして、「MMUの本棚」を基礎演習の担当教員全員が共有する。そのうえで、担当教員は「MMUの本棚」のなかから、自身の担当するゼミ生が書評することになる本の候補を3～5冊程度選択することになる。

共有ブックリストとしての「MMUの本棚」に並ぶことになる本の具体的な選定方法は、次のような手順によって行う。

(1) 候補となる本のリストを各教員が提出

リベラル・アーツ入門として新入生に読んでもらいたい本のリストを、各教員10冊程度リストアップのうえ提出する。その際、選書の条件としては、リベラル・アーツ入門として相応しい本という条件以外は示さない。これはリベラル・アーツ教育の理念や方法に関する見解を必ずしも共有していない可能性を逆手にとって、むしろそれぞれの見解や基準でリストアップしてもらうためであり、また各教員間のリベラル・アーツ観のズレや重なりを、後から相互に確認しあえる状況を作り出すためでもある。

(2) 暫定候補リストの公表

各教員から提出された本のリストをとりまとめ、暫定候補リストという形で公表する。この時、リストアップされた本が、どの教員によって選書された本か、あるいは特定の本が何名の教員によってリストアップされたかといった情報は伏せ、純粋に本の書誌情報(著者、書名、出版社など)のみを公表する。

(3) 暫定候補リストから「MMUの本棚」に並べたいと思う本を各教員が推薦する

公表された暫定候補リストのなかから、各教員が「MMUの本棚」を是非飾って欲しいと思う本を、20冊程度推薦する。ただし、各教員は暫定候補リスト用に自分が選書した本を、自分自身で推薦することはできない。これは、ほかの教員が選んだ本のなかから、自分なりの基準で改めてリベラル・アーツに相応しい候補を「発見」するためであり、同時にほかの教員に対しても同様の「発見」の機会を一時的な自己(の候補の)否定を通じて相互に提供するものである。このことは、リベラル・アーツの根幹に関わる知的態度、すなわち他者の考えを知ると同時に自己の考えを相対化していくことにもつながるであろう。

(4) 「MMUの本棚」に並ぶ本の確定

暫定候補リスト上の本のうち、(3)で推薦した教員と(1)で暫定候補リスト向けに選書した教員の合計が、3名以上だった本をピックアップしたものを「MMUの本棚」に並ぶ本の確定リストとする。最終確定の条件を推薦教員と当初の選書教員の合計2名以上ではなく3名以上とした理由は、一つには2名以上とした場合に確定リストの冊数が多くなり過ぎる可能性を考慮したためであるが、二つにはリベラル・アーツの教育の理念から、より多様な立場や視点から選定された方が望ましいと考えるからである。最終的な確定リストは、おおよそ50冊から100冊の間に収まることを想定している。

なお、確定した冊数は50冊なり100冊なりに揃えた方が見栄えがよい等の意見もあろうが、ここは特定の冊数にはこだわらない方がよいであろう。結果としてどのような本が何冊、3人以上から推薦あるいは選書されたかという事実自体が、本学のリベラル・アーツ教育や基礎演習を考

えるうえで貴重な検討材料になると思うからである。

3 「MMUの本棚」のレイアウトを編集する—MMU型リベラル・アーツの「再発見」—

「MMUの本棚」を飾るべき本（共通ブックリスト）は確定した。次は、本棚への本の並べ方（レイアウト）を検討しなくてはならない。論者らは、共通ブックリストの作成以上に、この「MMUの本棚」のレイアウトを編集しデザインするプロセスが重要だと考えている。まずは共有されたブックリスト「MMUの本棚」を題材に、学生をはじめ大学内外に対して、リベラル・アーツの面白さや奥深さを、本学の魅力としていかに分かりやすく「表現」することが出来るか。そうした作業を試行錯誤しながら実践することを通じて、自分たちなりの「リベラル・アーツ」像を再発見＝再構成していくこと。リベラル・アーツの再文脈化のためには、単なる共通ブックリストの作成にとどまらない、さらになる仕掛けを用意しておくことが欠かせないだろう。

以下、「MMUの本棚」のレイアウトをどのように編集しデザインしていくか、そのイメージを示すことにしたい。

（5）プロジェクト・チームによる「MMUの本棚」のレイアウト編集

「MMUの本棚」のレイアウトを編集するにあたっては、教員全員で当たるのが望ましいが、なかなか難しい面もあろう。そこで若干名の教員と職員からなるプロジェクト・チームを編成する。プロジェクト・チーム（以下、PT）のメンバーは、上記で説明した（1）～（4）までのプロセスにおける連絡や実務も担当する。なおPTのメンバーのうち、暫定候補リストのとりまとめや推薦リストのとりまとめは、原則として事務系の職員に依頼して、教員のメンバーには一般の教員と同様に、どの教員がどの本を選書・推薦したかは開示しない。

PTは「MMUの本棚」に並ぶ本の確定後、選書あるいは推薦した教員に対して、該当する本についての寸評あるいは推薦理由の投稿を依頼する。基礎演習において学生が書評をする前提なので、投稿してもらう文章は、長すぎると教員による書評になってしまう恐れがある。そこでSNSのツイッターに倣って、例えば140字以内を目安に投稿してもらい、学生にもそのまま公表する。

PTのメンバーは、「MMUの本棚」の確定リストに加え、教員からの投稿内容も参考に「MMUの本棚」のレイアウトを検討・編集する。この時レイアウトを決めるために、ブックリストをさらに幾つかのグループに分類し、また分類のための判断基準も設定しなければならないだろうが、それらはア prioriには設定しない。例えば「時代を超えた古典」といったカテゴリーや、「学際的な作品」といった判断基準を事前に設定しておくことは出来よう。しかし、この作業は本学におけるリベラル・アーツの再文脈化、いわばMMU型リベラル・アーツの「再発見」のプロセスでもある。ゆえに、あくまでも共有された確定ブックリストと、本学教員による寸評や推薦理由をもとに、PT内の自由（リベラル）な討議の結果にゆだねるべきであろう。

PTによる「MMUの本棚」の編集レイアウト案は、基礎演習担当者会議等の場において公表し、

そこでの意見や議論を踏まえて、PTの判断によって必要であれば修正等を行うものとする。こうして決定したレイアウトに拠って、「MMUの本棚」は文字通り大学図書館の特設コーナーの本棚という形でも、大学ウェブサイトの特設ページという形でも、新入生向けの小冊子という形でも、様々な媒体を通じて、宮崎公立大学の考えるリベラル・アーツ像を「表現」し、かつ大学の内外に対して「公言」(profession) していくことが出来るだろう。

4 「MMUの本棚」という仕掛けを使い倒すーリベラル・アーツの再文脈化への「入門」ー

以上、足早に、宮崎公立大学におけるリベラル・アーツ教育の再文脈化にむけた一種の仕掛けを、「MMUの本棚」(仮称)という形で、どのように構想(デザイン)できるか具体的に検討してきた。

こうした仕掛けは、他にもっと違った形で構想することできるだろうが、ここではあくまで「MMUの本棚」にこだわり、それを一種の触媒のように用いて、本学の教育・研究活動の活性化のために様々な形で使い倒すことを考えてみたい。

例えば、「MMUの本棚」のウェブ版や小冊子のデザインに、ウェブデザインや出版デザインに興味を持つ学生にも参加してもらおう。「MMUの本棚」のリスト改定時に、新たに学生にも選書委員やPTのメンバーとして、参加を呼びかけてみることも出来るだろう。あるいは大学図書館の広報誌での、「MMUの本棚」をテーマにした連載記事の企画なども出来るかもしれない。

ただし「MMUの本棚」という仕掛けを使い倒すためには、できれば本棚のリストやレイアウトは定期的に更新していくことが望ましい。リベラル・アーツの再文脈化は、一度きりでは不可能である。文字どおり何度でも繰り返し「再文脈化」していくことなのである。グローバル化社会とも高度情報化社会ともいわれる後期近代社会において、リベラル・アーツの再文脈化の試みは、教員個々の見識や実践の単なる積み重ねでは実現できない。積み重ねて浮かび上がるはずの「最大公約数」、リベラル・アーツについて誰もが共有している暗黙の同意はもはや不在と考えるべきなのだ。だとすれば、われわれの再文脈化への試みは、「公約」できないズレや異質性を隠蔽したり排除したりすることによって、あたかも「最大公約数」(同意)があるかのように振る舞うことではありえない。むしろズレや異質性を浮かび上がらせる対話や議論の場を、ゼミや読書会、研究会や学会、共同研究や共同執筆といった多様な試みを通じて、いわば「不同意の共同体」[レディングス, 2000:ch.12]として創り出し続けること。それこそが時代状況と対話しつつ、リベラル・アーツを繰り返し「再文脈化」することにつながるのではないだろうか。こうした意味での再文脈化によって、宮崎公立大学において「リベラル・アーツ」を公言(profession)する可能性をはじめたぐり寄せることが出来るだろう。

「MMUの本棚」という仕掛けは、基礎演習に取り組む大学新入生にとってリベラル・アーツ「入門」という意味を持つが、同時に大学や教職員にとってはリベラル・アーツの再文脈化「入門」という意味も持つだろう。二つの「入門」を基礎演習という場でクロスさせながら、どちらの「入門」者にとってもそのための第一歩となって欲しい、というのが論者らのねらいであり希望でもある。

その意味で、東京大学出版会の『UP』誌四月号の恒例企画「東大教師が新入生にすすめる本」がそうであるように、あたかも年中行事＝お祭りのように楽しめる仕掛けこそ、リベラルアーツの再文脈化にとっては大事なことなのかもしれない。何より「リベラル・アーツ」とは、「知への愛」であり、「知の愉しみ」でもあるのだから。

<注>

- (1) しかも、公立大学の教員一人あたりの学生数が11人と言われている中で、本学は、学生総数を専任教員数で割ると（平成26年5月1日現在 学生数＝925人、専任教員数＝34人）教員一人あたりの学生数は、およそ27人強。国立大学の平均10人に遠く及ばないばかりか、私立大学の平均22人をも上回っているのが現状である。無論、こうしたデータが、医療看護系など実習系の科目の多い、ゆえに他の学問領域に比べ構造的に少人数が必須の条件として好まれる学部学科が含まれていることも考慮にいれなければならないが、しかし、こうしたデータの前に、少人数教育という「キャッチフレーズ」もまた、厳粛に吟味され洗練させる必要があることもまた事実であろう。
- (2) 教授（professor）、職業（professional）、公言（profession）については、[デリダ, 2008:9-21]を参照。デリダは「条件なき大学」という講演を、「信仰告白」（profession de foi）のようなものとして語り始める（「大学は真理を公言し、真理を職業とします」）。近代の大学は「条件なき大学」でなければならないというデリダは、真理についての問いが人間の問いとつねに結びついてきたこと。この「人間」という概念は、「新たな」<人文学>の空間において、無条件に、前提なしに議論され、練り直されること。この「新たな」<人文学>は、「無条件的で前提を欠いた議論の場を、何かを検討し再考するための正当な空間」を、「大学や<人文学>の内部に閉じこめるためではなく、逆に、コミュニケーションや情報、アーカイブ化、知の生産をめぐる新しい技術によって変容する新たな公共空間へと接近するための最良の方法」として見いだすものだとしている。本論考は、デリダのいう「条件なき大学」を、後期近代の現代において「新たな」<人文学>として構想する、ひとつのささやかな試みともいえよう。
- (3) ここでいう「教養あるグローバル人材」に求められる「卓越化」の「技能」が、レディングスのいう、グローバルな「官僚制的経営体」に変貌しつつある今日の大学と、それが準拠する「エクセレンス」（卓越性）というそれ自体は空虚な、非指示的かつ経営的な概念と近似して見えるのは偶然ではないだろう。レディングスは『廢墟のなかの大学』で、勤務していた大学の校章が、ラテン語のモットーの書かれたものから、新しい、明らかに「企業的」なロゴに代えられ、古い校章は学位記など公的文書だけに用いられるように

なった経緯を紹介している[レディングス,2000:14]。本学でも同様に、開学20周年を記念して新しくロゴ(コミュニケーションマーク)が創られたのは記憶に新しい。このコミュニケーションマークについて、大学のウェブサイトでは、「宮崎公立大学のブランド価値を高めるべく、…(中略)…新たに開発されました」(宮崎公立大学「コミュニケーションマーク・校章・愛唱歌」 <http://www.miyazaki-mu.ac.jp/university/mark.html>)と説明されている。

<参考文献>

- 小林康夫・山本泰 2005 『教養のためのガイドブック』東京大学出版会。
静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科(編)2013『国際文化学への第一歩』すずさわ書店。
デリダ,ジャック、西山雄二(訳) 2008 『条件なき大学』月曜社。(=Jacques Derrida 2001
L' Université sans condition, Galilee.)
東京大学出版会『UP』編集部(編)2012 『ブックガイド 東大教師が新入生にすすめる本』東京
大学出版会。
文藝春秋(編)2004 『東大教師が新入生に薦める本』文藝春秋。
_____ 2009 『東大教師が新入生に薦める本 2』文藝春秋。
レディングス,ビル、青木健・斎藤信平(訳) 2000 『廃墟のなかの大学』法政大学出版局。
(=Bill Readings 1996 *The University in Ruins*, Harvard University Press.)
広島大学総合科学部101冊の本プロジェクト(編) 2005 『大学新入生に薦める101冊の本』岩波
書店。
広島大学101冊の本委員会(編)2009 『大学新入生に薦める101冊の本 新版』岩波書店。
山口県立大学国際文化学部(編) 2013 『星座としての国際文化学:みつけて、つなぐ、学びの
スタイル』青山社。
吉見俊哉 2011 『大学とは何か』岩波書店(岩波新書)。

